

## 佐土原キリスト教会 2023年10月29日 礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書6章5～8節

## 説教題：神に祈る

私は、車のCDプレイヤーが正常に動いている時、車の中で森下辰衛という先生が三浦綾子さんについて語っているCDを聞いていたのですが、こんな話が出て来ました。三浦綾子さんが前川正さんに導かれて教会に行くようになった時、彼女は礼拝中、一番後ろに立って、礼拝を後ろから「この人達は本当に信じているのか」といような目で眺めていたと言います。「祈り」の時も目を閉じなかった。「この人達は本気で祈っているのか」という眼差しで祈る人達を見ていた。ある人が「綾子さんは『祈り』の時に目を開けて皆を見回していました」と証言したそうです。「それを証言した人も目を開けて見ていた」ということですが…。森下先生は言うのです。「それだけ真剣に本物を求めていたのだ」。その彼女がクリスチャンになると、今度は人に「お祈りしてね、お祈りしてね」と言う人へ変わったそうです。彼女は書いています。「私は良く人様に『お祈りしてください』とお願いする…私は、しかし決して気軽にお願ひしているつもりはない。この言葉を口から出す時、私の心の中には、キュッと引き締まった厳粛な気持ちが流れている。本気で言っているのだ。祈りを聞いて下さる神がいられる。だから祈りは聞かれる。ゆえに人々に祈って頂きたい…」(三浦綾子)。「祈り」に対する信仰を持って生きられたことが分かります。三浦綾子さんも、祈り、祈られることなしにはやって行けなかったのです。私達の生活にも、自分の力ではどうにもならないこと、あるいは取り返しのつかないことがしばしば生じます。しかし私達には、「祈る」という道があるのです。ある牧師が言いました。「私達がたとえどんな困難な所に立っているにしても、祈ることが出来る限り、道は必ず前に開ける」(小島誠志)。「祈り」はクリスチャンだけの特権ではありません。まだ洗礼を受けていらいっしょらない方の「祈り」も、神は喜ばれます。今日は「祈り」について学びます。

「山上の説教」がずっとそうであるように、イエスは「祈り」についても、パリサイ人や律法学者の間違った在り方を示して、「それは間違っているから、あなた方はこうしなさい」と教えて行かれます。イエスは「祈り」について2つの点を指摘されます。

1つは5節、「祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです」(5)。「祈り」に一生懸命に向かう時にも、偽善が入り込む危険があると言われるのです。しかしこのことは、祈っているからこういうことが問題になるわけです。つまり「祈り」の偽善について考える前に、まず「祈っているかどうか」、そこが問われるのではないかと思います。フォーサイスという神学者が「最悪の罪は祈らないことである」と言っています。シンガポールにいた時、ある姉妹が話してくれました。その姉妹が一寸とした失敗をして随分気にしておられました。ご主人に話したら、ご主人は「君は祈っていたのかい」と言われたそうです。彼女は「祈っていなかったのですよね」と言われました。私は、この話を印象深く覚えているのです。信仰生活は、何があるかないかに拘らず—(失敗するかしないかは別に)—「祈り」によって支えられ、造り上げられるものではないかと思うのです。フォーサイスの言葉は、『祈らない』ということは、いくつもある罪の1つということではない。『祈らない』ということが、罪の根になる」という意味ではないかと思ひます。「祈り」無しに靈的な信仰生活を建て上げることは、出来ないのではないのでしょうか。その意味で「祈り」の偽善を問う前に、いや「祈り」の偽善を良く理解するために、「祈り」によって信仰生活を造って行くことを、私達はまず考えなければならないと思ひます。

しかし、イエスはこの箇所でも、『祈り』は大切だから、絶えず、熱心に祈りなさい」と言っておられるわけではありません。例えば「ルカ18章」には「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された」(ルカ18:1)とあります。絶えず熱心に祈ることも、イエス様は奨めておられます。しかしこの文脈のポイントは、信仰になくしてはなら

ない「祈り」が、ともすれば間違っただけになってしまう、その間違いを指摘し、正しい在り方に導くことです。当時のユダヤ人は「祈り」を大切にしました。「祈る人」は尊敬されたのです。羽鳥明先生が晩年、「今は伝道の働きもなかなか出来ないので祈りに専念しています。1日に3~4時間、何百人という人の名前を1人1人上げてお祈りしています」と言っておられました。私は「信仰の人だな」と思いました。しかしユダヤの人々にとって、祈る人に対する尊敬はもっと大きなものだったのです。ですから自分を「宗教指導者」と自認しているパリサイ人や律法学者にとって、「祈ること―(祈りの姿)」で人々の尊敬を得ることは重要なことだったのです。だからそこに「人に見られなくて―(見られようとして)―祈る」という問題が入り込んでいたのです。ユダヤ人には、1日に3度、「祈りの時間」がありました。午前9時、正午、午後3時です。この時刻には、何処に居ようが祈らなければならなかった。逆に言うと、この時刻に人通りの多い通りとか、会堂の入り口にいれば、熱心に祈る姿を多くの人に見せることができたのです。そのようにして人々から「あの人は『祈りの人』だ、信仰的な人だ、敬虔な人だ」という称賛と尊敬を受けて、満足したのです。

しかし、そのような彼らの「祈り」に対して、イエスは「彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです」(5)と言われました。「報いを受け取っている」という言葉は、「全額受け取りました―(頂くべきものは全部頂きました)」という商業用語です。本来、神様に祈ったはずなのに、「神から来るものは何もない」と言われるのです。こんな話があります。ある人が夢を見ました。夢の中で、天使が彼を大きな礼拝堂の天井に連れて行きました。礼拝堂では聖歌隊の大合唱が行われていました。しかし不思議なことに、彼の耳にはその歌声が聞こえないのです。彼は天使に聞きます。「なぜ、私の耳にはあの歌声が聞こえないのでしょうか」。天使が答えます。「それは、あなたが今、神様の耳で聞いているからです。神様の耳には、彼らの讚美は届いていないのです」。パリサイ人が、神様にではなくて、人に聞いてもらおう、聞かせよう、と思って祈ったら―(人に「祈り」を捧げたら)―その「祈り」は、人の耳には届いても神様には届かないのです。神様に届かなければ、祈っても何も起こらないでしょう。人の称賛をもらったとしても、それで「全部」です。何の意味もない。私達は神様だけに向かって、神様に届くようにと祈っているのか、それが問われます。

しかしでは、私達はどのように祈ったら良いのでしょうか。6節「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」(6)。これは「人前で『祈り』をしてはいけない」ということではありません。ここで取り上げられているのは「礼拝」や「祈り会」での「祈り」ではなくて、「個人の祈り」のことです。そうすると「自分の奥まった部屋にはいりなさい…戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい」(6)というのはどういうことかということ、それは「人の目とか、人の目を意識している自分の心とか、おおよそ神との交わりを邪魔するあらゆるものを取り除いて、神と真剣に1対1で向き合いなさい」ということです。「密室の祈り」の大切さが語られるのです。(「密室の祈り」と言っても、特別な部屋が必要ということではありません。1人になって神に集中して祈ることが出来れば、それが「密室の祈り」です)。

こんな話を読みました。上田さんという方は、奥さんがある異端の宗教団体に入ってしまう、3人の子供まで引きずり込まれていました。上田さんが気づいた時には、彼らはマインドコントロールでどうしようもない状態でした。彼は、家族を救出するためにキリスト教会に助けを求め、聖書を学ぶようになります。彼は「マインドコントロールは愛によってしか解けない」と学び、家族を取り戻すための努力を続けます。やがて長女が宗教団体の施設から帰って来ました。ところが、その団体が長女を連れ戻しに来ました。暴力沙汰です。その時、彼の目に聖書の言葉が飛びこんで来ました。「祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」(6)。彼は、玄関の騒ぎをよそに、奥の部屋に入って祈り始めました。必死で

祈りました。するといつの間にか団体の人達が帰って行きました。それだけではない、長女はその人達について行かないで、「怖い」と叫んだかと思うとマインドコントロールから解放されたのです。そこから家族の回復が始まるのです。(最近の「百万人の福音」にも、お母さんが統一教会から解放された方の証がありました。本当に深刻な問題です)。

特別な話かも知れませんが、私達も信仰生活の土台のところに日毎の「密室の祈り」、神様と本当に1対1になって、真剣に神に向かって祈るような「祈り」が欲しいと思うのです。そしてその「祈り」を通して、「隠れた所で見ておられるあなたの父が…報いてくださいます」というイエス様のこの言葉を体験することが大切なのではないのでしょうか。「なかなか祈れない」と仰る方がおられるのでしょうか。フォーサイスは「祈りは意思、祈れないのは祈ろうとしないからだ、祈ろうとすれば祈れるようになる」と言っているそうです。「祈ろう」とする意志が大切なようです。「奥まった部屋」と訳されている言葉は「宝がしまっている倉庫」という意味を持ちます。「密室の祈り」をすること、それ自体が宝の部屋に入っていくことなのです。真剣に神様と1対1で向かい合う、そのような「祈り」の中に踏み込んで行きましょう。「祈り」の生活を造って行きましょう。

しかし「密室の祈り」をより良く造るために、イエスはもう1つのことを指摘されます。7~8節「また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません」(7~8)。「異邦人」とは「本当の神が分からなくなっている人々」という意味で使われているようです。その人々は「同じ言葉をただ繰り返す」ような「祈り」をする。当時の人々(本当の神を知らない人々)は、知っている限りの神の名を次々に挙げて祈ったようです。異邦世界には神が一杯いる。でも、どの神が本当に当てにして良い神か分からない。だから知る限りの神の名を呼ぶのです。漫画で「神様、仏様、キリスト様」と祈っている人を見ましたが、そういうことでしょうか。そして「この神が効く」ということになる、その名を繰り返し呼んだのでしょうか。あるいは良く分からない呪文のような言葉を繰り返して、あたかも自己陶醉のようなになったのかも知れません。そしてここがポイントですが、彼らが考えていたのは、そのような「くどい祈り」によって名を呼ばれた神は、必ず出て来て何かをしなければならぬということでした。「ことば数が多ければ聞かれると思っている」(7)というのも同じことです。「こんなに祈ったのだから、この『祈り』を聞きなさいよ」と、自分の「祈り」の長さによって、神に自分の言うことを聞かせるような思いで祈る。そういうことがあったのだらうと思います。

しかしイエスは言われる。「彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです」(8)。「密室の祈り」をすることとして、私達は何を祈るのでしょうか。私達が最も必死に祈るのは、困った時、苦しい時、悩みや問題の中にある時、その解決を求めての「祈り」だと思います。その時に、私達は膝を折るようにして祈るでしょう。「長い祈り」を捧げることもあるでしょう。「憐れんで下さい」という言葉を繰り返す、それ以外の言葉が出てこないこともあります。イエス様も、決して「長い祈り」や、そういう「切実な祈り」が悪いと言っておられるわけではありません。イエスも「長い祈り」をされました。ただ「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられる」(8)、これはどういうことかという、私達は「『自分の祈りによって、神に自分の言うことを聞かせようとする』、あるいは自分の『祈り』で物事をコントロールしようとする、そういう『祈り』をする必要はない」ということではないのでしょうか。「私達に本当に必要なものを神が知っていて下さる」とイエスは言われるのです。

こんな話があります。ある所に1人の農夫がいた。農夫は、天候について自分の願うようにして欲しいと神に直談判しました。神は「やってみなさい」と言われました。農夫は大喜びして、種を蒔き、耕し、ここは雨、この時は日照りと、思う通りにした。種は発芽し、葉を出し、穂をつけ、いよいよ実を結ぶ時になった。ところが、何と穂の中に一粒の実も入っていなかった。農夫は風を

吹かせることを忘れていた。花粉が散らず、受粉せず、結実しなかったのです。

私達が願ったことが願った通り適うとして、私達は自分で全てを上手く導くことは出来ないのではないのでしょうか。人間の知恵には限界があります。そして私達は、自分の願いが永遠の観点から見た時に本当に良いことなのか、それも分からない。その意味で神が私達の本当に必要なものを知っていて下さることは感謝なことです。だからこそ安心して生きて行けると言っても良いでしょう。繰り返しますが、だからと言って切なる願いを祈ってはいけないということではありません。私達が神に願うことを、神は喜ばれます。しかしポイントは、「祈り」は願いごとを言い続けることだけではないということです。「神が私達に必要なものを知っていて下さる」のであれば、私達に必要なのは、何よりその神様への信頼ではないのでしょうか。それほど私達のことを心配して下さる、近くに居て下さる神に気づくこと、神が共にいて下さることを自覚すること、だと言っても良いのではないのでしょうか。それこそが「祈り」において必要です。それこそが私達を本当の意味で支えて行くのではないのでしょうか。三浦綾子さんが、恋人の前川正を結核で失い、人生の師であった方を失い、自分の脊椎カリエスの病気は重くなり、何もかも失って生きる意味を失くしている時、何が彼女を支えて行ったのか。彼女は祈るのです。その「祈り」の中で、彼女の部屋においてあった椅子にイエス様が座っておられるのを感じるのです。神を近くに感じたのです。そこから彼女は「神は良きことを為さる。いや良きことしか為さらない。前川正の死にもきっと意味がある。私は生きなければならない」という信仰が、生きる力が、生まれて来るのです。

私達は本当に神の前に静まって、神の中に身を浸すようにして、近くにいて下さる神に気づけるように、その神様に信頼出来るように、それを願い求める、そのような「祈り」も大切なのではないのでしょうか。イエスはその後すぐ「主の祈り」を教えて行かれます。「主の祈り」の「最初の祈り」は「御名を崇めさせ給え」です。人間の知恵や考えが終わったと思うところで、神の御旨は終わっていない。神は「終わった」と思うところから新しいことを始めて下さる方です。「その神様を信頼させて下さい」という「祈り」です。そのような「祈り」の積み重ねによって、時に「大変だ」と思うようなことが起こっても、その「大変だ」と思う理性さえも否定するようにして、「神は下手なことを為さるはずがない」という、神に委ねる信仰に導かれて行くのです。「イザヤ」を通して神は言われました。「落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る」(イザヤ 30:15)。そのような「祈り」が私達の信仰生活を支え、豊かなものにしないのでしょうか。神に信頼しない信仰には力がない。「神は…あなたがたに必要なものを知っておられる」、この主の言葉を握りしめて、主が報いて下さることに信頼して祈る、信頼して委ねる、そのような生きた信仰を持ちたいと願うのです。